

日本工芸データベース —在外コレクション所蔵作品を中心とする画 像データベース構築について—

ビンチク・モニカ[†] 前崎信也^{††}

17, 18 世紀には建築の装飾として、そして 19 世紀後半はジャポニスムの流行の結果として、多くの陶磁器や漆器が日本からヨーロッパにもたらされた。世界中のコレクションに日本の工芸作品の所蔵があることは知られているが、作品画像のデジタル化やオンライン・データベースの公開は進んでいるとはいえない。立命館大学アート・リサーチセンターでは在外コレクションに秘蔵される日本の工芸作品のイメージ・データベース構築を進めている。研究に耐えうる詳細画像を備えた学術的データベースの構築・公開は、これまで果たされてこなかった、世界的な情報共有による研究の国際化を促進する。

Digital Archive Project to Catalogue Exported Japanese Decorative Arts

MONIKA BINCSIK[†] SHINYA MAEZAKI^{††}

Japanese ceramic and lacquer objects have been collected and used as interior decorations in Europe since the early seventeenth century, and in the nineteenth century the fashion for *Japonisme* saw a boom of importing various Japanese decorative arts. Museums and private collections all over the world have rich holdings of Japanese decorative arts, however, the systematic research of Japanese decorative arts in Western collections is backward compared to other art forms, consequently there are only a very few online databases dedicated to decorative arts. The Art Research Centre of the Ritsumeikan University recently has developed image databases of three-dimensional art objects. The purpose of the project is to launch searchable, academic databases with high quality images to foster international cooperation and information sharing between researchers, curators, students of Japanese decorative arts and finally make the results accessible on the Web.

はじめに *

立命館大学アート・リサーチセンターでは 1998 年の創設時から、海外コレクションに所蔵される有形・無形の日本文化遺産のデジタル・アーカイブ化を行っている[1]。2008 年度より、アーカイブ化の対象に立体作品を含め、特に在外コレクション所蔵の陶磁器・漆器・竹工芸のデジタル・アーカイブ化を進めている。この日本工芸データベース・プロジェクトの目的は、海外の日本工芸作品所蔵機関と協力しデータベースを拡充すること、及び、各機関の所蔵情報の共有化による国内外の研究者の連係を促進し、より活発な研究活動につなげることである。

1. 在外コレクション所蔵の日本工芸作品

16 世紀、ポルトガル人を意味する「南蛮人」の渡来から時を置かずして日本とヨーロッパとの活発な貿易が始められた。1596 年、スペイン人が来航。1609 年にはオランダ東インド会社が平戸を貿易の拠点とする。イギリスもまた 1613 年に平戸に拠点を設立したとされる。しかし、1630 年代に徳川幕府によって進められたいわゆる「鎖国」政策により、対外貿易は長崎でのオランダと中国、対馬を経由した韓国、蝦夷を経由したロシアといった限られたルートのみとなり、貿易規模の拡大も限定的であった。この状況は 1854 年の日米和親条約による開国まで続いたが、ペリーの「黒船」来航により、徳川幕府化で形成された社会的秩序は大きく揺らぎ大政奉還から更なる開国へとつながってゆく。

このような流れの中において、漆器や陶磁器は日本の主要な輸出品でありつづけた。16 世紀後半から 17 世紀初頭、蒔絵や螺鈿がちりばめられた南蛮漆器の多くは西欧の需要を受け輸出を目的に製作された。漆器は贈答品として珍重されると同時に、イエズス会他のキリスト教修道会の注文を受けて製作されるなどして西欧にもたらされた。その嚆矢は 16 世紀のポルトガル向けの輸出であったが、日本の漆器が西欧諸国で広く知られるようになったのは 17 世紀前半のことである。珍しい素材とエキゾチックな意匠で装飾された日本の漆器は、貴族や裕福な商人の収集の対象となり、高級品として宮殿や邸宅を飾ったのである。

日本の磁器輸出は漆器からしばらく遅れて始まった。日本における磁器生産は 17 世紀初め、九州北部の肥前地方が発祥とされている。その背景には中国磁器との深い関係がある。元代以降中国磁器は世界各地に盛んに輸出されたが、17 世紀の明から清への王朝の交代時の動乱によりその供給が急激に落ち込んだ。オランダ東インド会社

*[†] 立命館大学 衣笠総合研究機構 RA

Research Assistant, Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University

^{††} 立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 PD

Postdoctoral Fellow, Ritsumeikan Global Innovation Research Organization, Ritsumeikan University

はこの供給不足を補うために日本に代替品を求めたとされている。「輸出伊万里」の名で知られる日本磁器は漆器同様、ヨーロッパの王侯貴族を魅了し、食器としてだけでなく、宮殿や邸宅の壁面を彩る装飾品としても使用された。中でも世界的に知られるのはドイツ・ザクセン選帝侯アウグスト王のコレクションである。ドレスデン国立博物館には、現在も18世紀初頭にアウグスト王によって収集されたコレクションの一部にあたる約2000点の日本磁器が所蔵されている[2]。

17世紀後半から18世紀のヨーロッパ、特にフランスでは地理的な世界の拡大に伴い、極東の諸国への興味が広がった。そして、18世紀中頃には東洋への関心に伴い漆器や磁器への興味が頂点に達したのである。中国・日本の漆器・磁器は宮殿を飾る家具などに盛んにもちいられたことが現存品から知られるが、これがフランスを中心にドイツやイギリスでも盛んとなった「シノワズリー」である。結果的に日本の漆器や陶磁器の輸出は幕末まで途切れることなく続いただけでなく、小規模ながらもアジアやヨーロッパ、そしてアメリカ大陸といった世界的な流通システムにのり、世界中のあらゆる地域にもたらされた。

明治維新後の19世紀後半は日本工芸史にとって大変重要な変革の時代である。特に各国で催された万国博覧会に日本が参加したことにより、日本の工芸品が広く欧米人の知るところとなった。これが「ジャポニスム」流行のきっかけとなり、多くの外国人が日本を訪れる結果となった。そして、欧米の収集家を相手にした美術商が台頭し、日本美術関連の書物も盛んに出版されるようになるのである。

一方、日本では政治的、経済的そして社会的な変化により、手工芸に携わっていた職人は新たな収入源を開拓する必要に迫られた。そこで急激に伸長する輸出貿易に注目する者も少なくはなかった。漆器や陶磁器だけではなく、金属器、木竹器も全国各地で生産され貿易港に運ばれた。特に竹籠は万国博覧会で展示され、間もなく欧米のコレクターやデザイナーにその高い技術水準を評価される。このように19世紀後半から20世紀前半にかけて、新旧問わず、多数の工芸品がフランス、イギリス、ドイツ、アメリカといった欧米諸国に輸出されていった。そして、この時代こそが、欧米の主要な日本工芸のコレクションが形成された時代でもあったのである。

2. 在外工芸コレクションをとりまく現状—秘蔵され続けるコレクションとイメージ・データベースの役割

在外コレクションに所蔵される日本の工芸資料情報へのアクセスへの容易さは、所蔵機関によって大きな開きがある。大英博物館[3]のように全所蔵品のデータをインターネット上で検索できる機関もあれば、日本美術の所蔵があるか否かさえも不明な機関は少なくない。展覧会図録や所蔵品図録など、海外のコレクションに関係する多くの書籍が出版されているが、工芸コレクションに関する系統立てた研究は進んでい

るとはいえない。展覧会図録類は例えば「ジャポニスム」といったテーマにそったものが多く、コレクションに所蔵される一部の優品に注目される場合が多い。系統立てて全所蔵作品を掲載した図録は少なく、基本的に博物館等のコレクションは購入や寄贈などで常に拡大を続けるため、全コレクションカタログの出版は現実的に不可能といってもよい。

近年のデジタル技術の発達や国公立の諸機関による工芸品のオンライン・データベース化により所蔵品情報へのアクセスは徐々に改善してきている。この流れは、デジタル撮影機器の急激な進歩と普及による高品質デジタル撮影の低コスト化によるところが大きい。先述の大英博物館をはじめ、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館[4]、ボストン美術館[5]等多くの日本美術を所蔵する機関においても作品画像を含めたコレクション・データベースのインターネット上での公開が進められている。これはまでは外部非公開であったコレクション・データベースの可視化は、収蔵庫に長期間秘蔵されていた作品の存在を明らかにし、知られざる優品の発見が期待できるだけでなく、美術史上の新たな研究分野や様式への注目など、様々な研究への広がりも期待できる。

立命館大学アート・リサーチセンターのデジタル・アーカイブ・プロジェクトでは、これまでに進められてきたデータベース化プロジェクトにいくつか新たな試みを加えている。既存の公開データベースの多くは、1作品1画像で、多くの場合ポジフィルムからスキャンした画像を用いたものが多く、作品の全体像を捉えるには不十分であった。また、海外においては日本工芸を専門とする研究者が少なく、メタデータの信頼性の問題が常に存在した。そこで、本プロジェクトが構築を進める日本工芸データベースでは、1作品につき4枚から20枚以上の画像を撮影し、日本語と英語のデータを備えている。作品の撮影は研究者自らが行うため、専門研究者にとって必要な画像・データを備えたデータベースの構築が可能となる。更に、本研究プロジェクトが調査対象とする欧米の所蔵機関にとって、作品のデジタル化事業に占める日本工芸の優先順位は低い。そのため、それぞれの機関が独自に進める所蔵品のデジタル化に期待しては、その公開がいつになるかわからない。そこで本プロジェクトが果たす役割は、海外の作品所蔵機関との共同プロジェクトとして高画質の作品画像を撮影し、データを準備して、可能な限り公開することとなるわけである。この活動は国内外の更なる研究の刺激となるだけでなく、これらの画像を用いた新たな研究にもつながっていくものと考えることができる。

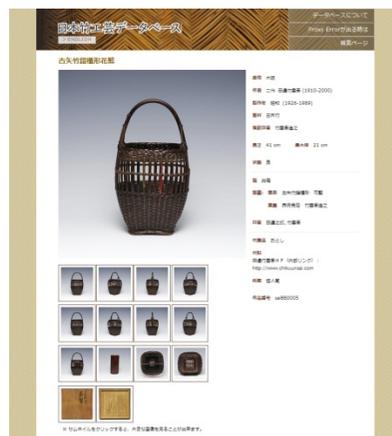
3. 工芸データベースについて

美術に関連する学問、博物館・美術館に携わる美術史家や学芸員は、一般的に美術品自体を研究対象とする。理想的なデータベースとは、作品に実際に触れて調査をす

ることと、データベースから得ることのできる情報から調査をすることにより得られる結論が一致することである。当然のことながら、画像の観察からだけでは、作品の重量やそのバランス、表面の質感など未だ表現できないことは多く、画像データベースのみでその理想を果たすことは不可能と言わざるをえない。しかし、専門研究者であれば、高画質で撮影した作品全面の画像さえあれば、その作品が研究するに足るか否か程度の判断は十分に可能である。そして、場合によっては作品の画像よりも重要となるのが、作品に付随する資料の画像である。例えば、共箱の有無や箱書、そしてその書体も重要な研究対象となる。



図 1 (左) 日本陶磁器データベース詳細画面
図 2 (右) 日本竹工芸データベース詳細画面



日本工芸データベース・プロジェクトでは先述のように、1点につき複数枚の画像を準備し、各作品の詳細な状態を把握することが可能である。特に立体作品はそのデザインも前面に立体的に配されていることがあるが、そういった連続性のある意匠の把握ができる。更に他の多くのデータベースでは欠けているような、共箱・箱書・極等、作品に関連する資料の作品も撮影を行う。

既存のデータベース所収の画像は多くの場合著作権や不正利用を防止するために画像の品質とサイズを抑えたものになっているが、本データベースが公開する画像は作品の詳細な状態を確認するのに必要なサイズと品質を確保している。基本的には研究資料として撮影している画像ではあるが、多くの画像は出版に耐えうる品質を保持している。

日本語と英語で準備されたメタデータはそれぞれの作品のサイズ・素材・技法・意匠・産地・製作年など工芸の専門研究に必要とされる基本的データを完備する。加えて分野に特化したデータも備える。例えば漆器では、作品に施された様々な技法、用いられている特殊な素材(金粉・螺鈿)は年代推定に重要な資料となり、それを判別するための顕微鏡を用いて撮影した画像は非常に有効である[6]。

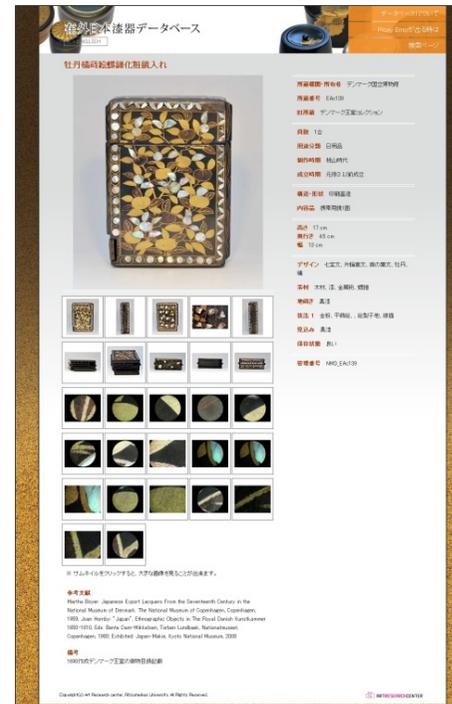
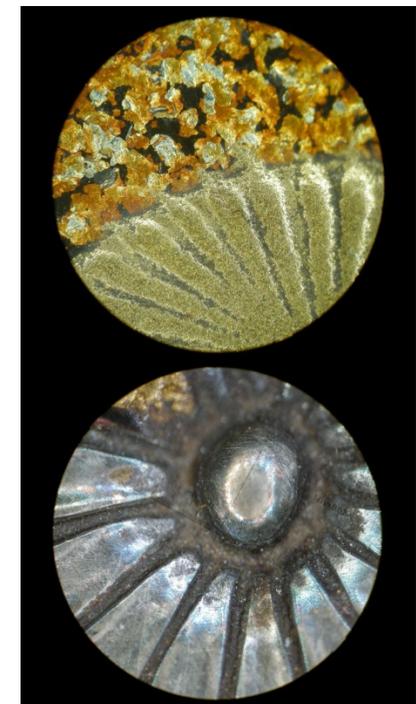


図 3 (左) 在外日本史漆器データベース詳細画面
図 4 (右) 漆器の顕微鏡写真, 50倍拡大



工芸データベースの構築と拡充により、日本国内の研究者が在外コレクションに所蔵される作品を知ることができる。当然のことながら、実際の研究のためには作品の実見・調査が不可欠であるが、海外に渡航することなくどのような作品がどの機関に所蔵されているのかを知ることができるのは、調査研究の費用と時間の負担を軽減することにもつながる。

2009年より開始したこの工芸データベース・プロジェクトは、陶磁器データベースから始まり、現在は漆器と竹工芸も調査範囲に加えている。現在の作業の中心は調査撮影、及びデータの拡充である。

2011年4月迄にデジタル化したコレクションは以下である。

陶磁器 (1603 作品,15,071 画像) [7]

- ・スコットランド国立博物館 National Museums Scotland (Edinburgh, UK)
- ・ハンブルグ装飾工芸美術館 Museum für Kunst und Gewerbe (Hamburg, Germany)
- ・プラハ国立美術館 Národní galerie v Praze (Prague, Czech Republic)
- ・ミシガン大学美術館 University of Michigan Museum of Art (Michigan, USA)
- ・ハワイ大学アウトリーチ・カレッジ・アジア美術コレクション
University of Hawaii, Outreach College Asian Art Collection (Hawaii, USA)
- ・個人コレクション Private Collections (UK and Japan)

竹工芸 (145 作品,1804 画像) [8]

- ・個人コレクション Private Collections (Japan)

漆器 (500 作品,8057 画像) [9]

- ・デンマーク国立博物館 The National Museum of Denmark (Copenhagen, Denmark)
- ・ボストン美術館 Museum of Fine Arts, Boston (Boston, USA)
- ・ラッセル・コーツ美術館 Russell-Cotes Art Gallery (Bournemouth, UK)
- ・キオッソーネ美術館 Edoardo Chiossone Museum of Japanese Art (Genoa, Italy)

4. 工芸データベースにおけるデジタル化ワークフロー

- (1) 在外の諸機関に対して日本工芸のコレクションの所蔵調査
- (2) 調査・撮影の許可取得
 - ・画像の著作権 (多くの場合では撮影者の著作権を所蔵機関に移譲する)
 - ・画像の学術利用へのプロジェクト関係者による許可取得
- (3) デジタル撮影
 - ・使用するカメラ Nikon D3X, Nikon D3 等
 - ・照明は撮影する素材による
 - ・背景は市販のバックペーパーを使用
- (4) 画像処理
 - ・トリミング
 - ・各種画像作成 (tiff, jpeg)

- ・使用するソフトウェア Nikon Capture NX2, Adobe Photoshop CS5 等
- (5) メタデータ作成
 - ・工芸DB統一項目 (所蔵機関名, 作品名, 作者名, 落款印章, 寸法, 付属品, 産地, 製作年, 素材, 技法, 保存箱の有無, 箱書, 形態, 状態, 関連資料, 旧蔵者, 参考文献, 展覧会)
 - ・陶磁器専用項目 (窯名, 図案, 絵付)
 - ・漆器専用項目 (構造, 蒔絵技法, 粉, 図案, 図案出典)
 - ・言語 (日本語, 英語)
 - (6) 所蔵機関に画像及びデータの納入
 - (7) データベースへの画像及びデータのアップロード

5. 今後の課題

欧米のコレクションは日本の工芸研究には欠かせない作品を多く所蔵している。今後、日本工芸データベース・プロジェクトが目指すのは、異文化・異分野にまたがる学際的研究や、各種研究機関の共同プロジェクトの促進である。また、工芸データベースは、一般的な美術史の作品研究だけではなく、作品の保存状態の調査、コレクション形成史、道具移動史など多様な研究に寄与できるよう改善を進める必要がある。

参考文献

- [1] 川嶋将生,赤間亮,矢野桂司,八村広三郎,稲葉光行:日本文化デジタル・ヒューマニティーズの現在,ナカニシヤ出版(2009). 赤間亮,富田美香編:日本文化研究とイメージデータベース,ナカニシヤ出版(2010). 立命館大学アート・リサーチセンター, www.arc.ritsumei.ac.jp
- [2] Pietsch, U., Reichel, F., Loesch, A. and Dresdener Porzellansammlung: State Art Collections Dresden Porcelain Collection: Guide to the Permanent Collection in the Dresden Zwinger, Staatliche Kunstsammlungen Dresden (1998).
- [3] 大英博物館, http://www.britishmuseum.org/research/search_the_collection_database.aspx
- [4] ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館, <http://collections.vam.ac.uk/>
- [5] ボストン美術館, <http://www.mfa.org/search/collections>
- [6] ビンチュク・モニカ: イメージデータベースと輸出漆器研究の新たなコンテクスト—作品へのアクセスの可能性・可視化によって研究はどう変わるか?—,2010年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会,アート・アーカイヴ—多面体:その現状と未来,慶應大学, pp. 44-47 (2010.6.13).
- [7] 日本陶磁器データベース, <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/jcdb/>
- [8] 日本竹工芸データベース, <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/bbdb/>
- [9] 在外日本漆器データベース, <http://www.dh-jac.net/db9/JapaneseLacquers/FMPro>